『鎌倉大草紙』から御物絵巻『をくり』へ

――小栗譚の発生と形成――

木村晃子

はじめに

御物絵巻『をくり』は、小栗判官と照手姫の二つの物語から織りなされている。その『をくり』の破天荒に造型された男主人公へ「小栗」という名が与えられた背景には、常陸小栗氏に関わる史実がある。小栗譚の発生と関連を持つ常陸小栗氏の滅亡を記した『鎌倉大草紙』は、文献上に小栗譚が登場する最古の記録である。この『大草紙』の小栗譚と『をくり』の内容を比較してみると、主要なモチーフが類似していることがわかる。そのため、成立年代が先行する『大草紙』から『をくり』[1]へと、物語の細部に様々な要素が付け加わって物語が形成されていったと推測できる。ゆえに、常陸小栗氏の滅亡という史実と『大草紙』の小栗譚、さらに『をくり』へ至るまでの小栗譚の変遷をどのように系統立てるのかが、小栗判官研究の課題の一つとなる。しかし、これら三者の間を埋める文献がないため、小栗譚の発生と形成を解明するには、もはや小栗譚の語り手を介在させて考察を行うしかない。

そこで本稿では、小栗譚を語っていた語り手自身の姿が物語中の登場人物に投影されて、その造型が展開して肥大化し、それに伴って物語中での役割も重くなっていくとみる。そしてまず『大草紙』と『をくり』の本文を比較して、語り手を想定する。その想定を前提として『大草紙』の本文を手掛かりに小栗譚の発生を考察し、さらに『大草紙』と『をくり』の本文の比較を通してその形成過程についても言及していく。

一

まず、『鎌倉大草紙』に掲載されている小栗譚の本文を以下に掲げる[2]。

一　応永卅年癸卯春の頃より、常陸国住人小栗孫五郎平満重といふ者ありて謀反を起し、鎌倉の御下知を背ける間、持氏御退治として御動座成らる。結城の城まで御出、同八月二日より小栗の城を攻めらるる。小栗兼てより軍兵数多城より外へ出し防戦けれども（中略）終に城を攻め落とさる。小栗も行方知らず落ち行けり。今度小栗忍びて三州へ落ち行けり。其子小次郎はひそかに忍びて関東にありけるが、相州権現堂

といふ所へ行けるを、其辺の強盗ども集りける処に宿を借りければ、主の申は「此牢人は常州有徳人の福者の由聞く。定て隨身の宝あるべし。」。打殺して取るべき由談合す。「去りながら健なる家人どもあり。いかがせん。」と言ふ。一人の盗賊申すは「酒に毒を入れ、呑ませ殺せ。」と言ふ。「尤も。」と同じ、宿々の遊女どもを集め、今様など歌はせ、踊り戯れ、かの小栗を馳走の体にもてなし、酒を勧めける。其夜酌に立ちけるてる姫と言ふ遊女、この間に小栗にあひ慣れ、この有様を少し知りけるにや、自らもこの酒を呑まずしてありけるが、小栗を哀れみ、この由をささやきける間、小栗も呑むやうにもてなし、酒をさらに呑まざりけり。家人どもはこれを知らず、何も酔伏てけり。小栗はかりそめに出るやうにて、林の有間へ出て見ければ、林の内に鹿毛なる馬を繋ぎて置けり。この馬は、盗人ども海道中へ出、大名往来の馬を盗み来けれども、第一の荒馬にて、人をも馬食ひ踏みければ、盗ども叶はずして林の内に繋ぎ置きけり。小栗これを見てひそかに立ち帰り、財宝少々取り持て、かの馬に乗り、鞭を進め、落ち行ける。小栗は無双の馬乗にて、片時の間藤沢の道場へ馳行き、上人を頼ければ、上人哀れみ、時衆二人付て三州へ送らる。かの毒酒を呑ける家人並びに遊女少々酔ひ伏けるを、河水へ流し沈め、財宝を尋ね取り、小栗をも尋けれどもなかりけり。盗人どもは其夜分散す。酌に立ちける遊女は酔たる体にもてなし伏けれども、元より酒を飲まざりければ、水に流れ行き、川下より這ひ上がり助かりけり。其後、永享の比、小栗三州より来てかの遊女を尋ね出し、種々の宝を与へ、盗どもを尋ね、皆誅伐しけり。其孫は代々三州に居住すといへり。

小栗氏は、応永二十三年（一四一六）の上杉禅秀の乱で禅秀側にくみして以来、鎌倉公方の足利持氏と対立していた。そして応永三十年、ついに小栗城は持氏の攻撃を受けて落城する。『大草紙』では、その合戦の有様が記述された後に、上掲の引用文において落城後の小栗氏の行く末が語られている。

この『大草紙』小栗譚は、『大草紙』の編者が創作したものではなく、巷間に伝えられていた逸話を組み入れたものと考えられる。なぜならば、この小栗譚は『大草紙』の他の記事と異なって説話的な「けり」の文末表現で記述され、また遊女や時衆など武士以外の人物が登場していて、史書の体裁から逸脱しているからである。年代にそって歴史的な出来事を叙述してきた『大草紙』の姿勢からしても、小栗氏の記事が落城にとどまらずその後日談にまで及んでいるのは、編者が既存の逸話を採録したためと考えられる。そうだとすれば、この『大草紙』の小栗氏に関する記事内容を検討して、小栗譚の発生について論ずるべきであろう。では、『大草紙』の小栗譚は何を伝えようと意図しているのだろうか。

この小栗譚は、常陸国から逃れて相模国に潜んでいた小栗が、盗賊に襲われる危機を乗り越えて三河国へ逃れていくまでの出来事を描いている。冒頭で「忍びて三州へ落ち行」た「小栗」とは、落城の時に当主であった小栗満重のことである。しかし、すぐに小栗譚の語り手の視点は「其子小次郎」へ移る。「小次郎」

とは、満重の子の助重をさしていることは間違いない。そしてこの小栗助重に関する逸話が叙述されていくのだが、そこでは助重の武士としての傑出した能力が強調されている。まず、無謀に逃走するのではなく、酔ったふりをして「かりそめに出るやうにて林の有間に出」て逃げる手段を確認した手際。それから、わざわざ「ひそかに立ち帰り、財宝少々取り持」たことも、逃亡後まで目を配った冷静な判断である。また逃亡に際して、助重は盗人の手に負えなかった「第一の荒馬」を軽々と操った。ここからは、武士として馬術に長けた助重像がうかんでくる。それと同時に、逸話には逃亡を援助した遊女「てる姫」や藤沢の時宗の上人と助重との縁も語られていく。特に助重は、三河国へ逃亡した後も助けてくれた遊女を忘れずにいて、再び相模国を訪れて恩を返している。さらに、自分に危害を加えた盗人には報復を行った。このように、助重が馬乗りの名手であると同時に状況判断が的確であり、また人への恩や復讐を忘れないことを記している。このことから『大草紙』の小栗譚は、助重が武士として優れた資質を備えていたこと、また助重が三河国へ逃れていく途中でのさまざまな機縁を語ることを目的としていたといえる。

二

以上のような目的意識のみられる『鎌倉大草紙』の記事は、小栗譚の変遷の中にどのように位置付けられるだろうか。その考察を行う前に、具体的に小栗伝説の発生と展開、すなわち常陸小栗氏と『大草紙』と『をくり』へ至る形成過程を考察した福田晃氏の説に触れておく。[3] まず福田氏は、常陸小陸氏が滅亡後に亡霊となって常陸の地へ災いをもたらしたので、小栗氏の亡霊の慰撫が必要となった、とする。そして鎮魂のために行われた神明巫女の語りこそが小栗譚の始まりである、と推測した。神明巫女は、馬を呪術で自由に操るとともに、死霊の消息を語る職能を持つ。そして常陸国の神明巫女は、伊勢大神宮の御厨領という縁で結ばれた相模国の大庭の神明巫女と交流があった。その交流によって小栗譚は常陸国から相模国へと運ばれ、大庭の神明巫女によっても語られるようになる。小栗の地を離れたことによってひとまず在地の鎮魂信仰から切り離されたその物語は、大庭の神明巫女に語られる過程で馬の乗りこなしや蘇生のモチーフを核として肥大していった。そして大庭の神明巫女は藤沢に時宗道場が開かれるとともに時衆へと習合されていき、呼称も仏教的に念仏比丘尼と称されていった。こうして世間に伝えられていった小栗譚は、早い時期に『大草紙』に収録される。その際に小栗譚は、『大草紙』の編者の手で合戦記という目的に沿わない蘇生モチーフなどが削除され、歴史化をされた。その一方で大庭の神明巫女が語っていた小栗譚は、相模国の六浦や美濃国の青墓に集う遊行巫女や、念仏者でもある説経師によって語られるようになって、さらに変容していった。以上のような福田氏の論によれば、小栗譚は常陸国の神明巫女による小栗氏の亡霊の慰撫に起因し、さらに神明巫女が時衆と深い関わりを持つようになってから物語として発展したことになる。

また堤禎子氏は、関東における最高権力者の鎌倉公方という地位にある足利持氏へ長期にわたる抵抗を続けた小栗氏一族が、

世間の人々にはこの世ならぬ力を持つ者として意識されたのではないか、とする。[4]その上で、『大草紙』の小栗譚の直前に配されている応永二十九年の記事に、上杉禅秀の乱で禅秀側についたために滅ぼされた佐竹支族の山入氏について「其霊魂祟をなしける間、一社の神に祭りける」という記述があることに触れている。したがって、山入氏と同様に、小栗氏が恨みをのんで滅び去ったことは当時の人々の久しく記憶するところだった、とする堤氏の指摘は、先の福田氏の論の傍証ともなろう。しかし、両氏が指摘するように神明巫女の語り始めた小栗譚が人口に膾炙したのは人々の心に無残な小栗氏の滅亡が深く刻まれていたからだとすれば、『大草紙』の逸話に語られる助重には敗残者としての悲哀が強調されていてしかるべきではなかろうか。それに反して「其孫は代々三州に居住すといへり」としめくくられている小栗譚の終りかたは小栗助重の子孫繁栄を予感させ、もはや小栗譚が落武者の助重の逸話を語っている悲劇であることを感じさせない。この点について福田氏の説では、小栗譚を『大草紙』に収録する際に編者が意図的に改変を行ったため、と説明される。しかし小栗譚の原型と『大草紙』の小栗譚のモチーフに大きな差異はないという本稿の立場からは疑問が提示されよう。

さらに、なぜ落城後すぐさま三河国へと落ちのびていった小栗氏の当主の満重ではなく、満重の子の助重の武勇が語られているのかも説明されなければならない。その解明には、なぜ助重が「永享の比（一四二九～一四四〇）」に報恩や復讐を行ったのかが鍵となろう。なぜならば、助重の報恩と復讐が永享年間に実現したのは、小栗氏を没落させた足利持氏が永享の乱（一四三九）で自害したために、助重の身辺が安全となり、様々な行動をおこすことができるようになったと考えられるからである。つまり、『大草紙』の小栗譚にあらわれる「永享の比」が、歴史上小栗氏が再び動き出すことの可能になった時期と重なっていくのである。史実では、助重は結城合戦の功によって常陸国へ帰り、嘉吉元年（一四四一）年に小栗家を再興している。しかし、わずか四年後の康正元年には再び古河公方の足利成氏に攻められて落城し、小栗氏は二度と旧領を回復することはできなかった。[5]

このような史的な背景はあるものの、『大草紙』には満重も助重も三河国へ下った後にどうなったのかについての記載はない。助重に関する逸話は、助重が遊女への報恩と盗賊への復讐を行ったところで終わっている。しかし、逸話が「今度小栗忍びて三州に落ち行けり」で始まり、「其孫は代々三州に居住すといへり」としめくくられている点に注目しなければなるまい。ここでは、小栗氏が落ちのびていった三河国に焦点があてられている。そして三河国には、常陸国から逃れていった小栗氏の子孫がいる。逸話よりもさらに後日談である小栗氏の子孫への言及は、あるいは編者が加筆した一文かもしれない。しかし、編者が採録した小栗譚の原型における助重個人の逸話を記そうとする姿勢が、三河という地から発せられたものであることが推測できるのである。つまり、落城によって「行方知らず落ち行」くと伝えられた小栗氏のその後の逸話は、三河小栗氏の子孫によって語り始められたものであることを、この一文が示してい

るのではあるまいか。短い期間で崩れ去ったとはいえ、常陸国へ戻って常陸小栗氏再興を成し遂げた助重は、小栗氏の子孫から見れば英雄であったろう。その先祖を語るという視点から伝えられた助重像には、合戦の敗残者としてのみじめさはない。常陸から離れて危機に遭遇しても、それを乗り越えられるだけの武士としての能力を持った英雄としての助重の姿が認識されているのである。ゆえに、遊女「てる姫」との契りや時宗の上人の援助によって危機を脱したことは、小栗氏が常陸国から三河国へ移ってきた由来を説く先祖語りの中で、先祖の助重が体験したこととして語り伝えられたと考えられる。

三

さらに、『鎌倉大草紙』の小栗譚で助重を援助するという重要な役割をもっている時衆に着目してみよう。盗賊のたくらみによって酒に毒を盛られそうになった助重は、「藤沢の道場へ馳行き、上人を頼」んだ。上人は「時衆二人」を助重に同行させ、安全に三河国へと送り届ける。当然ここには、助重が時衆と同じ出家の姿であったために怪しまれず、無事に目的地へ着けた、という含みがある。室町期の藤沢の道場、つまり時宗の総本山である遊行寺は、先行研究において治外法権的な側面を持っていたと推察されている。[6] 時宗の上人たちは、戦に敗れた末に進退極まって遊行寺へ駆け込んでくる武将を多く受け入れ、他の地へ逃すといった援助をしていたらしい。その上人の活動も、先祖語りに影響を及ぼしたと考えられるのである。

中世において時宗の上人が武士を助けていた事実は、文学作品や伝承にも反映されている。例えば、小栗助重の逸話よりも年代が溯る『太平記』の巻第三十八「畠山兄弟修禅寺の城にたて籠る事付けたり遊佐入道の事」には、畠山兄弟の逃亡を手助けする時宗の上人が登場する。[7] 関東管領の足利基氏と仲違いをして伊豆の修禅寺に立て籠っていた畠山道誓は、貞治元年（一三六二）に降伏し、箱根に陣を構える基氏の元へ弟の義深を送る。基氏は使者の義深を歓待し、一見和解は成立したかに見えた。しかし、裏では畠山討伐の準備が着々と進んでいたのである。道誓は「稲生平次」の密告によって基氏の真意を知り、「仮初に出づる由にて、中間一人に太刀持たせ」た上で、弟の義熙と一緒に「その夜まづ藤沢の道場までぞ落ちたりける」という行動をとった。そこから道誓は人知れず上洛するが、その際に時宗の上人は「かひがひしく馬二疋、時衆二人相そへて」旅の支度を整えるという援助を行っている。一方、箱根にいた義深にも「ある時衆」によって道誓の逃亡が伝えられた。意外な出来事に驚いた義深も長唐櫃に隠れて遊行寺へ逃れ、そこから兄の後を追って上洛する。しかし、畠山兄弟には誰も味方する者がおらず、惨めな末路が待っていたのである。

南都・山城脇辺に、とある禅院・律院・あるいは山賤の柴の庵、賤士がふせ屋のさびしきに、袂の露を片敷きて、夜を重ぬべき宿も無く、道路に袖をひろげぬばかりにて、朝三暮四のたすけに心有る人もがなと、身を苦しめたるありさま、聞くに耳すさまじく、見るに目も充てられず、幾程もなく、兄弟共にはかなく成りけること哀れなれ、

時宗の上人の援助によって危機はうまく脱せたものの、畠山兄弟は「山賤」同然に身を落とし、「幾程もなく、兄弟共にはかなく成」った。この一文の中に、合戦から逃亡の間中畠山兄弟に付き従い、ついには最期を見届けて遺体の処理もしたとみられる、陣僧としての時衆の存在が見え隠れする。陣僧は、願主が討死する時には十念を唱え、首を敵から貰い受ける。そして遺族に討死に至る願主の活躍の有様を伝え、葬礼を行うことを役割としていた。[8] さらに、合戦に出た時衆によって願主の遺族や縁者に伝えられた逸話に潤色が施され、『太平記』などの軍記物語が形成されていったことが金井清光氏によって指摘されている。[9] そうだとすると、時宗の上人が落武者の援助をするという同じ役割を担っている小栗譚にも、『太平記』と同様の成立の経緯が想定できるのではなかろうか。

『太平記』における畠山兄弟の場合と同じく、小栗氏の攻防と落城の際にも時衆が従っていたであろう。また、小栗助重が藤沢の遊行寺に駆け込んだことによって、確実に時衆との縁が深められている。そして時衆は小栗氏が三河国へ落ちのびるのを見届け、先に三河国へ落ちのびていた小栗氏の縁者や常陸国に残った一族に、小栗氏落城後の逸話を伝えたと考えられる。生々しい合戦から落武者として潜伏している間の危機までも見届けた時衆の話は、あるいは『太平記』における畠山兄弟のような悲哀を込めたものだったかもしれない。しかしその後小栗氏の逸話は時衆の手を離れ、小栗氏の子孫によって語り継がれていく。合戦に敗れて潜伏している小栗助重がさらに盗賊の難に遭うという内容は悲劇ではあるが、逸話は子孫の目から再構成されているために、『大草紙』の小栗譚には全く悲哀が漂っていない。助重が遊女や時衆の援助の下に三河国へ逃ることができた事実、また武士として傑出した能力を持っていた助重の人となりを語っていくのである。

さらにもう一つ、時宗の上人が落武者の援助を行った例を取り上げてみよう。それは、小栗氏と同様に足利持氏に追われて遊行寺の上人に助けられた、徳川氏の祖の得川有親と親氏に関する逸話である。永享の乱（一四三九）の際に将軍足利義教側に味方した新田一族の二人は、足利持氏から狙われるという危機に直面した。そのために二人は上野国を脱出して「其害をのがれん為に相州藤沢の道場へ入て」上人に結縁して出家し、有親は長阿弥、親氏は徳阿弥と号する。その後、有親が死去して「徳阿は孤独となり、三州酒井郷に蟄居」したという。[10] 落武者が藤沢の遊行寺で出家し、あるいは仮の出家姿になり、危機を逃れて三河国へと向かう構図は、前掲の小栗助重の逸話と変わらない。また、有親と親氏の逸話には、自らの先祖を新田氏と結び付けようとする三河徳川氏の意図が多分に反映されているとみられ、子孫によって伝えられた先祖の逸話であることが明らかである。[11] 徳川氏の先祖語りも小栗氏のそれも、成立年代の前後関係は論じ難い。しかし、三河の地の有力な武士の先祖語りとして両者が影響関係をもっていたことは十分に考えられるのである。

時衆が自らの見聞として伝えた逸話は、三河小栗氏の先祖語りとして受け継がれていく。そしてその先祖語りは世間へと伝

えられて行き、やがては『大草紙』の編者の耳にとまる。編者は信憑性のある小栗氏の逸話として、この先祖語りに端を発する小栗譚を史書『大草紙』に採録した。また一方で、一度は常陸国で再興を果たした小栗助重の縁から、この先祖語りは常陸国などの小栗氏ゆかりの地へも伝えられていったであろう。さらにそれらの小栗譚は宗教者や芸能者の語りに吸収される。こうして武士としての優れた資質を持つ小栗助重の造型が御物絵巻『をくり』へと受け継がれていくのである。

四

ところで、『鎌倉大草紙』から御物絵巻『をくり』への物語の形成はどのような語り手が担っているのだろうか。金井清光氏や角川源義氏らは、遊行する時衆が各地の小栗伝説を集約し、喧伝する過程で逸話を物語へと成長させつつ全国へ広めていった、としている。[12] また福田晃氏も、時衆に習合された女性宗教者によって小栗譚の形成が行われたと想定していた。[13] だが、時衆による小栗譚の形成については史料も皆無であり、その実態は闇の中であるといってよい。そこで、再び時宗の上人に着目して『大草紙』の小栗譚と『をくり』の比較を行ってみよう。

『大草紙』で時宗の上人は、盗賊から逃れて寺へ駆け込んで来た小栗助重を「哀れみ、時衆二人付て」三河国へ向けて送り出している。一方の『をくり』では、上人は墓から這い出て来たばかりの無力な餓鬼身の小栗を見つけて「横山一門に知らせては大事と思し召し、押へて髪を剃り、なりが餓鬼に似たぞとて、餓鬼阿弥陀仏と」名を付けた。そして閻魔大王の指示に従って、小栗の乗った土車を熊野へ向けて送り出したのである。ここでは、決して上人自身が持つ験力を発揮して小栗を蘇生させてはいない。現世へ小栗を蘇らせたのは閻魔大王であり、また完全ではなかった蘇生を完遂させたのは熊野の聖地にある湯の峯の湯であって、時宗の上人は小栗の二度にわたる蘇生劇のどちらにも直接関与していない。こうしてみると、『をくり』における無力で危機に陥っている小栗とそれを援助する時宗の上人という構図は、『大草紙』の段階から何ら展開していないといえるのではなかろうか。もし時衆が積極的に小栗譚を語って歩き、『大草紙』から『をくり』への物語形成の主要な役割を担っていたのならば、時衆はその過程で自らの信奉する上人の功徳を強調していってしかるべきであろう。しかしその発展が見られない以上、『大草紙』から『をくり』へと物語が形成される過程で時衆が大きな役割を果たしていたとは考え難いのである。

それでは、物語形成を担った語り手はどのような人々だったのだろうか。語り手を明らかにするためにもう一度『大草紙』の小栗譚と『をくり』を比較すると、小栗を助けた女性の造型が大きな変容を遂げていることに着目させられる。『大草紙』の助重の逸話では登場人物の一人でしかなかった遊女「てる姫」が、『をくり』に至っては物語全体の半分を構成する照手姫の物語へと発展している。具体的に述べると、女性の出自は『大草紙』では相模の遊女「てる姫」であったが、『をくり』においては武蔵・相模の郡代である横山殿の娘の「照手姫」となる。「てる姫」または「照手姫」は小栗へ害をなす人物とつながりがあり、契りを結んだ小栗へ危機を知らせる。『大草紙』の「てる姫」

はうまく小栗を救出するが、『をくり』の「照手姫」は悪夢によって察知した危機を小栗に納得させることができなかった。その結果『をくり』では、小栗が毒殺されてしまう。しかしそのかわりに照手姫は、小栗が地獄から再びこの世へ帰ってくる途中で、餓鬼阿弥となった小栗の乗った車を引いて施行をし、蘇生という危機脱出のための介添えをする、などの変容を挙げることができる。

この「てる姫」から「照手姫」への造型の変容に携わったのは、自らの境遇を照手姫に重ねながら物語を語っていった女性の語り手であると思われる。しかも、『をくり』の「照手姫」には『大草紙』の「てる姫」には見られなかった観音信仰や念仏信仰などの宗教性が付加されていることから、語り手が宗教者であることも確認できよう。中世から近世にかけての女性宗教者は、福田氏の指摘する通り、時宗と強く結び付いた存在であったと考えられる[14]。福田氏の説を裏付けるように、説経正本の延宝三年版『おぐり判官』と佐渡七太夫豊孝本『をくりの判官』では「藤沢の上人様」と照手姫のつながりもはっきりしている。しかし、二本よりも古態を示しているとみられる御物絵巻『をくり』や奈良絵本『おくり』では、本文中に照手姫と時宗の上人の交渉は皆無であり、照手姫の帰依している寺も「上の寺」または「上の山寺」と漠然としている[15]。つまり、『をくり』において照手姫と時宗の結び付きは明確ではないのである。

そこで注目しなければならないのは、『をくり』において餓鬼身の小栗を介助し、蘇生へと導いた大峰・熊野修験の山伏である。中世には彼らも教化のために物語を語って歩いていたと推測されるのだが、小栗譚とほぼ同時期に民衆に受け入れられていた室町期の物語には、語り手である大峰・熊野修験の山伏が多く登場する。その際に大峰・熊野修験の山伏は死者を蘇生させる験力を持つと意識されていることから、小栗譚の蘇生モチーフも彼らによって付加されたと考えられる[16]。そうだとすると小栗譚は、蘇生モチーフを付加した大峰・熊野修験の山伏と、照手姫の造型を肥大化した女性宗教者の両者の語りによって形成されていったことになる。このような中世における女性宗教者が巫女から念仏者への過渡期にあったとは推測できるが、実態は明らかになっていないのが現状である[17]。しかし、小栗譚を語っていた女性宗教者が大峰・熊野修験の山伏と活動をともにして物語を形成していったであろうことを考え合わせると、このような女性宗教者として熊野比丘尼を想定できよう[18]。しかも、『をくり』の本文からは、この語り手と想定される女性宗教者と時宗とのつながりを十分みいだすことができない。ゆえに、この語り手の女性宗教者がここで想定した熊野比丘尼であるならば、これまであいまいにしか論じられてこなかった中世における熊野比丘尼と時宗との関係に、新しい視座を開くことも可能ではないかと思われるのである。

むすび

最後に、本稿の想定する小栗譚の発生と形成過程をまとめておく。常陸小栗氏の滅亡と三河国への逃走には時衆が付き従っており、また小栗助重は逃走の途中で時宗の上人の援助を受けた。この助重の逃走の経過は、時衆によって小栗氏の縁者に伝

えられる。さらに三河小栗氏の子孫は、自分たちが常陸国から三河国へ移ってきた由来と、一時は家の再興を果たした英雄の助重についてを語り継ぎ、その逸話は小栗氏ゆかりの地にも伝わっていった。そしてこの逸話は次第に世間へ流布し、『鎌倉大草紙』にも採録された。一方、逸話は大峰・熊野修験の山伏や熊野比丘尼によって語られるうちに、蘇生のモチーフが付加され、また遊女「てる姫」の造型の拡大がなされた。さらに芸能民である説経者の手に渡る中で物語は整えられていく。そして近世初期になってから説経正本として出版され、御物絵巻『をくり』も成立するに至ったのである。

注

1　江戸の町絵師　岩佐又兵衛（一五九八～一六五〇）の作であり、詞書は寛永頃の正本を使用したと推測される。

2　『群書類従』第十二輯　所収。ただし、適宜漢字を仮名に改め、一部訓点を施して書き下し文にした。なお、『鎌倉大草紙』の成立年代は文明十一年（一四八〇）以降とみられる。

3　福田晃「「小栗」語りの発生―馬の家の物語をめぐって―」（『国学院雑誌』昭和四十八年十一月）及び「「小栗」語りの発生」（『中世語り物文芸―その系譜と展開―』三弥井選書　昭和五十六年）

4　堤禎子「小栗伝説と小栗の地」（『小栗氏と小栗伝説―小栗判官と照手姫の世界―』協和町教育委員会　平成二年）及び「祭りと伝承」（『茨城県史』茨城県史編纂委員会　昭和六十一年）ただし堤氏は、『大草紙』が世間の人口に膾炙するうちに説経へと発展したと述べるにとどまり、逸話の語り手については論じていない。

5　糸賀茂男氏が『協和町史』（平成六年刊行予定）において指摘なさっているように、小栗助重が常陸国で完全に再興を果たしたと断定することは慎重にならざるをえないが、小栗氏再興への動きが活発にあったことは疑問の余地はあるまい。

6　大橋俊雄『時衆の成立と展開』日本宗教史研究叢書（昭和四十八年　吉川弘文館）

7　新潮日本古典集成『太平記』第五巻から本文を引用した。

8　今井雅晴「陣僧の系譜」（『中世社会と時衆の研究』昭和六十年　吉川弘文館）

9　金井清光「太平記と時衆」（『時衆文芸研究』風間書房　昭和四十二年）この形成論は福田氏も小栗譚を論ずる際に踏襲している。

10　『御先祖記』及び『藤澤山遊行由緒書』（『朝野舊聞哀藁』第一巻「親氏君御事蹟第一」内閣文庫所蔵　史籍叢刊特刊第一　史籍研究会）この時の遊行寺の上人は、小栗助重が逃げ込んだ時と同じく太空上人である。

11　今井雅晴「遊行上人と貴種伝説」（『中世社会と時衆の研究』昭和六十年　吉川弘文館）

12　金井清光　前掲（8）及び角川源義「語り物と管理者」（『角川源義全集』第一巻　所収）ほか

13　福田晃　前掲（2）

14　福田晃　前掲（2）

15　照手姫の持つ「十二の手具足」も時宗の調度品の一つで、照手姫と時宗の関係を暗示するとの示唆もあるが（臼田甚五郎「小栗照手譚の周辺」昭和三十五年五月）、『をくり』の本文から読み取ることはできない。

16　また、室町期の物語を概観しても、時宗と蘇生譚の結び付きは全く見出だせない。

17　萩原龍夫『巫女と仏教史』吉川弘文館　昭和五十八年

18　柳田国男「巫女考」（定本『柳田国男集』第九巻　所収）

（茨城県立守谷高等学校教諭）